福井の戦国 歴史秘話 ⑧

朝倉義景時代の外交官、鳥居景近

5代当主朝倉義景の家臣の一人に、義景の側近として活躍した鳥居景近がいます。

鳥居氏はもともと南都興福寺の宗徒（僧兵）で、興福寺領の坂井郡河口庄に代官として派遣され、越前国に土着した一族でした。16世紀前半までに「与一左衛門尉」を名乗る系統と「兵庫助」を名乗る系統に分かれ、景近に代表される兵庫助家は、朝倉氏当主のかなり近い位置にあり、『朝倉亭御成記』にも景近が座敷奉行として登場します。

景近は、永禄10（1567）年に義景の〝取次〟として確かな史料に初出します。取次とは、いわば外交官のことで、当主の発給する外交文書に付属する副状を発給する役目を担いました。取次は家臣の2人組が務めることが多く、景近とペアを組むのは、元亀2（1571）年以降は高橋景業に固定します。景業の出自は不詳ですが、景近と同様に義景の側近です。両氏の連署状はこれまでに5通が確認されています。

元亀4（1573）年3月12日に近江国の朽木元綱に宛てて出された朝倉義景の書状があります。

〝将軍義昭様が（織田信長に）敵対されたことについて朽木殿も従われるとのこと、殊勝に思います。道中の安全についてご約束いただいたことから、昨日敦賀に出陣しました。今後は浅井長政としっかりと詳細を示し合わせながら、義昭様の意向に従い行動します。詳しくは、鳥居景近、高橋景業が申し上げます。〟

本状は後世の史料に書かれるのみであった元亀4（1573）年3月11日の敦賀出陣について、その状況を知ることができる貴重なものです。従来の義景の出陣を渋る弱腰のイメージとは全く異なり、この書状からは、義景が浅井氏ら反信長方と緊密に連携を取りながら出兵のタイミングを図っていた様子がうかがえます。そして、その重要な局面をともにしていたのが景近だったのです。なぜなら、書状の末尾に詳細は景近、景業両人が伝えるとあることから、義景の書状よりも詳しい副状が2人の連署状として発給された可能性が高いからです（ただし、現物は伝来していません）。

当時は、将軍義昭につくか信長につくか武将の立場が分かれる複雑な状況下でした。数日のうちに情勢が変化する中で、景近の外交官としての役割は、とても大きなものだったと考えられます。

外交官として、常に当主義景とともにあった景近。それを物語るように、元亀4（1573）年8月、景近は大野六坊賢松寺で義景とともに果てています。

朝倉義景知行宛行状（『鳥居文書』）
（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館蔵）

義景が鳥居一族に知行（土地）を宛てがったもの。

関連史料・ゆかりの地

鳥居景近・高橋景業の墓

（画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

元亀4（1573）年8月20日、鳥居景近は朝倉義景とともに大野の六坊賢松寺で果てました。現在、大野市泉町にある義景墓（写真右奥）のかたわらには、そっと義景を見守るように景近と高橋景業の墓が並んでたたずんでいます。

【住所】大野市泉町10（JR越前大野駅より徒歩15分）

参考資料等

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要　1997』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編「第15回企画展『古文書が語る朝倉氏の歴史』」
「第2回特別公開展『朝倉家臣団―重臣鳥居氏と堀江氏―』解説シート」福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

執筆・協力　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　学芸員　石川 美咲

発行／福井県観光営業部ブランド営業課